

越前荒土の活動を通して感じたこと

福井市棗小学校 教諭 小泉 智

福井県では、芸術推進事業「美術教育の推進（越前荒土の活用）」が行われています。これは、越前焼に使われている粘土を学校に配布し、制作後の焼成まで支援するための事業です。「粘土で一から焼き物づくりって、授業でさせてみたいけど、費用がなあ…」と悩む教員たちの願いを叶えています。

私の小学校では、全学年でこの事業に参加しました。私は、1・2年生と6年生の指導に入りました。粘土と言ったら油粘土やマシュマロ粘土が当たり前になっている子どもたちです。彼らは一様に、本当の土粘土の手触りに感動し、「うわー！」という歓声を上げていました。それからずっとテンションMAX状態で、みんなで粘土をこねこね練ったり、穴を空けたり、ひもで切ったりして遊びました。その後は、塊に戻してから、本制作に入りました。いつにも増して真剣な目で、子どもたちは作るものを考えていました。（何を作ろうかなあ）

図工の授業の楽しさは、教員も子どもたちも、全員一緒になって感動を味わえることだと私は思っています。新しい材料と出会ったときの感動もそうですし、作りたいものや、その表現方法を一緒に悩んで、乗り越えたときの感動もそうだと思います。私自身は、初めて粘土に触ったときに感動した記憶はもうありませんが、きっとこんな感じだったのだと、今日の子どもたちが全身で教えてくれます。本制作では、すいすい最後まで作れる子もいましたが、ああでもない、こうでもない、時間いっぱい試行錯誤する子もたくさんいました。それでも、最後に「できたあ！」と満面の笑みを見せてもらえると、自分にもその感動が流れ込んでくる気がします。やってよかったなあ、しみじみ感じます。これが、私が教員を続けるとても大きな原動力になっています。